

終戦70年 体験を語る

①

終戦70年を迎えた。平和とは何か、私は今、何をなすべきか。先の大戦を記憶する「体験者」が高齢化し、少なくなっている。あの惨禍を二度と繰り返さないために、「体験者」の記憶を記録し、後世に伝え、平和について考えていきたい。(1日号で連載予定)

太平洋戦争の戦局が悪化する中、爆弾を装着した兵器で敵艦へ突撃するという捨て身の作戦で、多くの若者が戦死した。いわゆる「特攻隊」である。

その一番隊は1944年10月、海軍による神風特別攻撃隊として編制された。25日にゼロ戦で出撃、フィリピン沖で米艦隊に体当たりした。

その一人が谷暢夫さん。20歳だった。

「最近まで、伯父が特攻隊で戦死したことを人には言えなかった」と話すのは暢夫さんの甥で、京都府舞鶴市・明教寺住職の谷公人さん(58)。



本堂には暢夫さんの母・一枝さんが愛媛県

の松山基地に最後の面會に訪れた際に手渡したものだった。

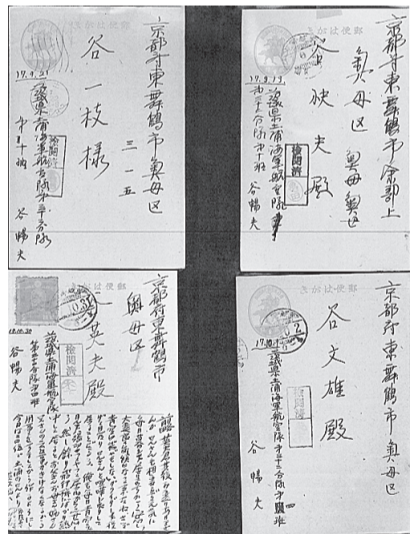
一枝さんは2000年に97歳で亡くなった。戦争については多くを語らなかつたというが、本堂に飾りつけられる肖像画を、どんな思いで見上げていたのだろうか。

暢夫さんの父で布教使だった文雄さんは1935年、本願寺が設

特攻で失った大切な人

「よいしや〜向きロ〜なよしひじ」

暢夫さんは17歳の戦況は悪化し、暢夫



その数日後、「近所の人」が知らせてくれた。それは、海に向かって花束を投げた。大きな波が打ち寄せ、そのしぶきがかかった瞬間、「ああ！」と思わず声を漏らしたという。

明教寺では毎年10月25日に報恩講を営む。暢夫さんが戦死した日と重なる。昨年は暢夫さんが戦死して70年。

「残された伯父の手紙や所持品などの遺品も生々しく見ることができず、向き合えない。遠くて手の届かない、重たくてどう向き合っていないかわからなかった。私には何も言わなかった祖母だったが、最近、祖母の遺品を整理していたら

伯父の予科練時代とは絶対に否定しないね、わが子の壮絶な死『反省録』が出てきた。といけない。わが子を喜ぶ親なんて…」と祖母はきつと肌身離さず、これを持っていたを伝え続けた。特攻でしようね。特攻隊という作戦の悲惨さ、なんて生み出すような戦争の悲惨さをちゃん

1975年、当時72歳だった一枝さんはフィリピンを訪ねた。飛行場があったルソン島のマバラカット、亡くなった場所であるレイテ島のタクロバンを訪ねた。海に向かって花束を投げた。大きな波が打ち寄せ、そのしぶきがかかった瞬間、「ああ！」と思わず声を漏らしたという。

時、難関といわれた甲種飛行予科練習生(予科練)に合格。舞鶴一中から茨城県の土浦海軍航空隊に入隊した。この予科練で、甲飛10期生として全国各地から志願選抜された1097人の少年たちと約3年間、パイロットとしての基礎を学び、操縦技術を修得した。

家族思いで筆まな暢夫さんの手紙やハガキが大切に明教寺に残

出た列車に窓から強